



情熱を表す色彩、 生命を宿す

フォーラム 画業65年記念
赤堀尚展 — 赤の軌跡
2013.4.19[金]—5.19[日]

「私の作品は99%現場での制作です。」という赤堀尚(1927年生)は、自然のなかで出会った感動を、即表現することを貫いてきました。

その姿勢を明確にしたのは、赤堀尚41歳、二度目のフランス留学中のことでした。南フランスへ向かう道すがら、赤堀は身体の奥底から描きたいという思いが沸き上がる風景に出会いました。そのときに描いたのが《南仏へゆく道》でした。思いのままに絵筆を走らせ、気づくと、キャンバスに鮮や

かな赤い帯状の雲を描き込んでいました。刻々と変化する空のなかから瞬時につかんだ色が、作品に一層の躍動感を生み出しました。

赤堀尚は、フランス滞在中に水彩画を数多く描きました。それは二度と出会えぬ情景を前にした感興が失われぬうちに、素早く描き留めるためでした。《小雪舞うパリ》は、滞在先のパリに珍しく雪が降ってきたことに興を覚え、雪花を紙に受けながら描きました。寒色を主とした色調、絵の具が互いににじみ溶け合う画面から、雪

の冷たさや大気の潤いが伝わってきます。

モチーフの精気を描き出す力は、静物画にも発揮されています。近年手掛ける薔薇は全て、自宅の庭で淳子夫人が丹精込めて育て上げた薔薇です。《十字の赤い薔薇》は、花の茎が縦横に伸び、画面

《十字の赤い薔薇》(油彩) 2006年



からはみださんばかりの勢いで薔薇が次々と花卉を広げています。生きる喜びに満ち溢れた赤堀尚の薔薇の絵は、多くの人々を魅了しています。

「よいと思った景色やものに素早く反応したいと思う欲求にかられるのは、いつも自然に囲まれて、三津(伊豆・沼津市)の採れたての魚や新鮮な野菜を食べてきたことが根っこにあるからではないでしょうか。」と語る赤堀尚。85歳にしてなお、みずみずしい感性を放ち続ける赤堀尚の代表作約80点が一堂に会します。

(学芸グループ主任 河内えり子)

《小雪舞うパリ》(水彩) 1968年



《南仏へゆく道》(油彩) 1968年



ミュージアムショップ

美術館リニューアルと同時にショップも生まれ変わりました!

高見沢木版社
木版画・赤富士(凱風快晴)
2,100円(税込)

中川政七商店
富士山ふきん
420円(税込)

銀座くのや おひざかけ
1,050円(税込)

香彩堂 練り香水
各735円(税込)

香彩堂
フレグランスサシェ(香り袋)
各420円(税込)

大藏達雄
根来漆の食器
朱線茶托
4,200円(税込)

和紋 そば猪口
各1,575円(税込)

桂樹舎 苗字封筒
各945円(税込)

中川政七商店
紅白花火玉お菓子
紅白飴
630円(税込)

プレゼントコーナー

※抽選で2名様に「ア」マークの品を差し上げます。
「プレゼントコーナー応募」、ご住所、お名前、電話番号、隆泉の感想と隆泉に掲載したい一言コメントを明記の上、佐野美術館「隆泉」係まで郵便かFaxでお送りください。一言コメントのテーマは「忘れられない展覧会」です。しめきり：2013年5月15日(消印有効)
・当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。
・いただいた個人情報はプレゼントの発送以外に使用いたしません。

愛するからこそ 美しい

—日本のプチファール

熊田千佳慕 プチファール
熊田千佳慕の世界展
2013.5.25[土]—6.30[日]

ふん玉どろぼうとの争い『ファール昆虫記の虫たち』



樹 液を求めて集まる昆虫たち、花々の間で乱舞するたくさんの

蝶、遠い国に暮らす動物たち。生き物たちの姿をまるで生きているかのように細密に描く生物画家、熊田千佳慕(明治44年・1911~平成21年・2009)。特に虫を描いた作品では、地面を這うような高さに視線を定め、等身大の虫の世界を正確に描き切り、日本のプチ・ファールと呼ばれました。

横浜の医家に生まれた千佳慕(本名五郎)は、幼稚園にいくのが嫌でたまらなかったといいます。しかし、勉強がいやなら絵を描いていればいいと言ってくれた先生と出会ったことが、絵描き・千佳慕の出発点となりました。この先生は、千佳慕がクマンバチの背中にジャンプして触ったのを褒めてくれて、虫たちの世界への扉を開いてくれたのでした。

一方、医師である父と、のちに詩人となる長兄とからは、虫を観察してすばらしい本を書いたフランス人アンリ・ファールについての話を聞き、生涯あこがれを持ち続けるようになりました。

その後千佳慕は、東京美術学校鑄造科に進学、グラフィックデザインの草分けである日本工房などに勤めました。終戦後、絵を描くことを再開して

からは、数本の筆の穂先に少量の絵の具を付けて細密に描いていく技法を会得しました。外国の物語の挿絵を描くことから仕事を始め、『ふしぎの国のアリス』『みつばちマーヤ』『オズの魔法つかい』などを次々と手掛け、絵本作家として高い評価を受けました。そして昭和46年、念願のファール昆虫記を絵本にするという企画が始まり、以後ファールの世界を絵で紹介する仕事に邁進しました。

千佳慕は後年、目の前にある生命を美しいと思うのは、その虫や花を愛する心が根底にあるからだと思うようになりました。「私は虫であり、虫は私である」自然が自分のためにあり、自分は自然のためにあると実感した後、千佳慕は自らの仕事の意味を深く理解したといえます。

生涯、虫たちの、生き物たちの世界を描き続けた千佳慕。その作品は、千佳慕が謳い上げた生命の賛歌なのです。

(学芸グループ長 坪井則子)

水色の世界『花のファンタジー』



©KUMADA CHIKABO